

目次

第20回大会に向けて	1	留学雑感	9
2007年度研究集会報告	2	ソシオロジー Rooted in Life	10
2007年度第3回理事会報告	6	会員の研究動向	12
在中会員通信	7	新入会員の声	13
		事務局からのお知らせ	16

■第20回大会に向けて

浅野慎一・西原和久（大会担当理事）

日中社会学会第20回大会は、6月7日（土）、8日（日）の両日、流通経済大学・新松戸キャンパス（大会実行委員：根橋正一会員、東美晴会員）において開催されます。

つきましては、

- ①「報告要旨」の書式
- ②「自由報告」の参加申し込み
- ③「報告要旨」の宛先
- ④お問い合わせ先

をお知らせします。

「自由報告」や「報告要旨」のことでご不明な点がございましたら、右記のお問い合わせ先（浅野慎一研究室）までお尋ねください。

①「報告要旨」書式

- ・A4用紙、40字×40行、明朝体で10.5ポイント、横書き、2頁とする。
- ・氏名、所属、報告題目を明記のこと。
- ・そのまま複写されることを念頭に作成してください。それ以外の資料は当日配布としますので、各自で用意してください。

②「自由報告」の参加申し込みについて

- ・「自由報告」は、封書による「報告要旨」の送付をもって申込とします。
- ・申込締切りは4月30日（必着）とします。
- ・連絡先（住所・電話番号(FAX)・メールアドレス等)を忘れずにお知らせください。

③「報告要旨」の宛先

- ・〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
浅野慎一研究室

④お問い合わせ先

- 浅野慎一研究室
- ・電話：078-803-7780
- ・E-mail：asanos@kobe-u.ac.jp

■ 2007年度研究集会報告

首藤明和（事務局）

2007年度研究集会在、昨年12月8日と9日の両日、早稲田大学（1日目）と、筑波大学・東京キャンパス（2日目）において開催された。

会場の提供や準備、また、研究集会のプログラム立案やメンバーのコーディネートなどで、長田洋司会員（早稲田大学）、石井健一会員（筑波大学）の両氏から、多大なご助力を頂いた。記して感謝申し上げる。

○ 1日目

- ・長田洋司
（早稲田大学アジア太平洋研究センター）
「現代中国都市基層構造の変化と社会的ネットワーク形成」
- ・黄 斌（早稲田大学大学院）
「中国における近代ナショナリズムの受容とネーションの想像—梁啓超・孫文及び章太炎のナショナリズム論を中心に」
- ・齋藤あつ子（早稲田大学大学院）
「都市小説に隠された現代中国社会」
- ・司会：陳立行（日本福祉大学）

長田洋司会員は、特に2000年以降の社区建設運動に着目しながら、改革開放から現在に至る都市住民組織の変遷と住民ネットワーク編成のあり方を考察した。

結論として、陳立行（『中国の都市空間と社会的ネットワーク』1994年）の所論も参照しつつ、都市の基層空間では「政治優越型空間秩序」から「経済優越型空間秩序」への転換が進んでいること、現在の社区は、高齢者や障害者といった日中も社区内に留まっている人々を中心に機能しており、かつての単位制のように世代・階級横断的な管理システムとしては機能していないことなどが主張

された。

長田報告を受けて、質疑応答では、①社区の定義、及び、事例の位置づけに関する問題（中央政府の社区建設の枠組みと北京市社区の実態との関係、調査社区の歴史的背景、街道弁事処・居民委員会・小区など諸委員会・組織と社区との関係など）、②都市部の社会的ネットワークにおけるキーパーソンと行政住民組織の関係、③都市空間再編における格差・序列化と社会的ネットワーク再編の関連、④移動と住民組織の関連、⑤社会的ネットワークの研究法に関する問題、⑥社区建設と高齢者福祉・高齢者問題との関係などについて議論がなされた。

黄斌会員は、中国のナショナリズム研究の混迷を、中国のネーションの出自に関する研究の欠乏や、古代に「中華民族」の出自を求めるアプローチの問題性と関連させて指摘し、その上で、近代ナショナリズムの受容とネーション像の編成について考察する必要を主張した。この課題へ取り組むにあたって、今後は、甲午戦争（日清戦争）から「五四運動」までの中国人エリート、梁啓超、孫文、章太炎のナショナリズム論を考察するという。特に、①「中華民族」は西洋や日本から受容した近代ナショナリズムによって創られた共同体であること、②中華秩序の崩壊、中華思想の否定、ナショナリズム理念の受容などにおいて、特に日本の影響が大きく、かつ、日本のナショナリズム論が、中国のナショナリズム論を性格づけていること、③中国のネーションの創造において、歴史の再構成や伝統文化と近代との接合が図られたことなどを明らかにしていくとされた。

黄報告を受けて、質疑応答では、①ネーション、ナショナルティ、ナショナリズムの概念規定の問題、②「中華」を、伝統的、普遍的な実体として捉えるのではなく、また、「中華」=漢民族ではない形で捉えるための、「中華」の位置づけに関する問題、③ナショナリ

ズムに関する先行研究のまとめ方、④モジュール（ナショナルリズム）と中国との関係、⑤中国人エリートとして、上にあげた3人を取り上げることの研究史上の意義、などについて議論が交わされた。

齋藤あつこ会員は、都市小説とは、近代都市における人間のあり方、すなわち、運命に逆らって生きる主体的な人間を描くものであると定義する。また、特に現代を生きる人間は、自由に生きることが難しい、あるいは、自由に生きてよいわけではないといったようなことに、意識的であるという。その上で、1990年代に中国で都市小説がブームになった原因を、経済、人間関係、欧米文化の影響と関連させつつ、価値観の多様化、規範性の後退などから分析する。都市小説の登場人物は、「ある個人」として描かれる場合と、「中国人そのもの」を象徴して描かれる場合があるが、特に中国の都市小説では後者の傾向が強く、かつ、そこで描かれる「中国人」とは、「自分が誰なのかわからなくなる」なかで「自己像を模索する」イメージが強いという。

齋藤報告を受けて、質疑応答では、①前近代から現在までの中国都市小説にみる様々な系譜をどのように整理するか、②都市—農村関係の見直しの必要性、③社会批判としての政治批判といった中国都市小説の性格との関連、④近代と伝統における道徳の位置づけ、⑤民衆文学にみる皮肉、アイロニーの位置づけ、⑥語る〈私〉と語られる〈私〉といった小説にみる自己言及的な二重構造ゆえに、本質的に語る事が不能な〈私〉のレベルがあるが、中国の都市小説で語られている「自分探しをする〈私〉」とは、むしろ、ある意味で中国社会に広く受け入れられた、ドミナントな〈私〉の姿なのではないか、すなわち、「私が誰だかわからなくなった」といった場合に、描くべき「わからない部分」が、果たして十分に描かれているのか、といった物語論に関連した問題、⑦中国、韓国、ヨー

ロッパの都市小説の比較研究における可能性などについて、議論が交わされた。

○2日目

- ・白鳥蘭（筑波大学大学院）
「中国・内モンゴルの面子とプライバシー—データ分析に基づいた意識を中心に」
- ・野村弘美（一橋大学大学院）
「中国における社会階層構造の変容と『技術系知的階層』——都市のライフヒストリー調査データから」
- ・石井健一（筑波大学大学院）
「欧米崇拜とアジア志向——内容分析と質問紙調査から」
- ・司会：首藤明和（兵庫教育大学大学院）

白鳥蘭会員は、「面子」や「プライバシー」の意識分析について、異文化理解やコミュニケーション理解での理論的説明に偏重してきた先行研究のあり方を批判的に検討し、白会員自身が実施した中国（北京師範大学、暨南大学、中山大學）と内モンゴル（内モンゴル大学）の大学生を対象としたアンケート調査から、「面子」と「プライバシー」の両者の関係について実証的に考察した。分析の結果、内モンゴルと中国の大学生のあいだでは、「面子」「プライバシー意識」が「伝統意識」「近代意識」と関連している一方、内モンゴルでは、「面子」「プライバシー意識」と「個人意識」との関連が小さく、反対に中国では関連が大きいことが明らかになったと主張された。

白報告を受けて、質疑応答では、①アンケート回答者の基本属性、②サンプリング方法、③因子分析に関連した問題（カテゴリーの設定基準など）、④「面子」概念をモンゴル族の意識分析に用いることの是非、⑤情報化のなかの面子やプライバシーの変容について、

議論が交わされた。

野村弘美会員は、科学技術を梃子とした経済成長を目指してきた中国において、社会階層や支配構造がどのように変容してきたのか、特に、官僚と専門職員（科学技術系・人文系）の3者を対象に分析した。

その結果、①科学技術系専門職を獲得するためには高い教育レベルが求められること、②政府系職員の高学歴化も顕著なこと、③人文系専門職、政府系専門職への就職では、父親の職業が同じであった/同じであることが重要であること、④文革以降、教育レベルの高いものが入党する傾向にあること、⑤専門職人員では、入党する確立が低下している可能性があること、⑥そのうち、科学技術系専門職のほうが人文系専門職よりも入党率が若干高いこと、⑦科学技術振興と科学技術に基づいた経済発展戦略のなかで、科学技術系専門職に従事する者が増加する傾向にはなく、かつ、共産党員の高学歴化（知識化）傾向がみられることなどが主張された。

野村報告を受けて、質疑応答では、①ダミー変数の置き方、②共産党入党要因の分析で「共青团」を従属変数/説明変数のいずれに置くか、③「良い階級」の意味、④政府系幹部の区分のあり方、⑤支配階級の区分のあり方、テクノクラートの位置づけ、⑥階層や支配構造の変容を、制度転換と捉えるのか、内部的要因の前面化と捉えるのか、⑦レギュレーションでは、多元的労働者や多元的中間層といった新しい労働者像について、さまざまな議論がなされてきたが、今回の分析対象は、あくまでエリートや党の担い手であって、新しい労働者像を提起するには至らないこと、⑧エリート層の世代間移動をどのように理解するか、⑨科学技術系専門職は、センサスデータやその他の階層調査を見る限り、増加傾向にあるのではないかと、⑩初職データのみから職業移動の実態を掴めるのかといった議論がなされた。

石井健一会員は、日本人の欧米志向・アジア志向の動向を実証分析し、その結果、①映像ソフト、ファッション雑誌の記事、新聞記事のいずれも、欧米志向が弱まりアジア志向が強まる傾向が見られたこと、②ナショナリズム意識と欧米志向には正の相関、アジア志向とは負の相関が見られたこと、③小泉首相の靖国参拝への賛否は、欧米・アジアのどちらを好むかという方向性に関係し、アジア志向をナショナリズム意識の拡大とみなすオリエンタリズムを否定するものであること、④物質主義的な価値観は、欧米志向と正の相関にあること、⑤メディア（テレビ、ニュース、インターネット等）の影響は、内容によって効果の方向性が異なること、などを明らかにした。

石井報告を受けて、質疑応答では、①オリエンタリズムとナショナリズムの関係をどう捉えるか、②オリエンタリズム論には様々な系譜（セルフオリエンタリズムやオクシデンタリズムなど、さまざまな〈自己〉と〈他者〉をめぐる近代の言説のあり方）があるなかで、操作概念としてのオリエンタリズムをいかにして設定するか、③アジアから生まれる〈アジア〉像に対して、いかにして分析の射程を確保するか、④物質主義や欧米志向の波には、アメリカのグローバル経済政策によるものや、フランス、イタリアのような文化経済政策によるものがあり、両者の関連を念頭に入れて、アジアにおけるグローバリズムとの交渉をみることも、ひとつの有効な研究視角ではないかというサジェッション、⑦グローバリズムのなかで、旅をするという行為は、旅先を選ぶという行為でもある、すなわち、一所不在のなかで越境を常態化するなかでは、既存の規範やカテゴリーとのズレが顕在化し、ここに新たなものが生み出される土壌が生成しているのではないだろうか、といった議論が交わされた。

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

なお、この度の研究集会の2日目には、新たな試みとして、会長、理事、会員諸氏が一堂に会して、今後の学会活動のあり方を話し合う「意見交換会」を開催した。以下に、その概要をまとめておきたい。

まず、中村則弘会長より、今後3年間の学会活動の柱のひとつとなる、「日中社会学会と中日社会学会の共同プロジェクトについて」説明がなされた。両学会の連携の大枠は、「日中社会学会ニューズレター51号」(2007年11月)に掲載された「中日社会学会との協議」で中村会長より既に報告されている。この大枠に沿って、具体的なプロジェクト案が示され、意見交換の結果、以下のような課題に取り組んでゆくことが確認された。

まず、I. 共同プロジェクトの研究テーマとして、①「東アジアからみる日本社会と中国社会」、②「西欧の中国研究の系譜的・批判的検討」といった課題に取り組む。

その際、日本から帰国した留学生のフォロー体制(共同研究基盤、中国での学術的発言権を得るための環境など)の整備が喫緊の課題である。この課題に対しては、中国側では羅紅光氏(中国社会科学院)を中心として、他の教育研究機関とも連携しつつ、メンバーの選定作業に着手することが確認された。また、日中社会学会としては、中国全土にわたる草の根の協同体制の整備や、科学研究費補助金の継続的な申請に向けた体制作りなどに着手することが確認された。なお、研究交流に要する費用は、今後、日中双方が半々ずつ負担することが目指すべき方向とされた。

上記①②の研究テーマは、両学会にとって存立意義にかかわる不可欠なテーマとして、両学会の長期研究プロジェクトの柱に据えることが確認された。その上で、とくに若手研究者を中心としつつ、研究集会やジャーナ

ルなどを通じて積極的に取り組むことが確認された。

次に、II. 中国での定期研究集会開催に取り組むことが確認された。ここでは、共通論題の設定やプログラムの作成は、先述の研究テーマと関連させつつ、両学会の連携の下に行う。運営方法について、①会場は、中国の主要な教育研究機関(この機関を主催者や共催者とする)や、国際交流基金の北京事務所ホール(一般参加を募る必要あり)、あるいは、中国社会科学院社会学研究所、北京市社会科学院社会学研究所、北京大学、中央民族大学などと交渉が可能であり、また、②通訳の人員確保では、両学会による組織的な対応が必要となる。さらに、③研究集会の成果は、随時刊行できるような体制作りに取り組まなければならない。④日程としては、8月の最終週に開催することが確認された。

その他、III. 日中社会学会と中日社会学会の組織運営レベルでの協力体制の整備や、IV. 東アジアフォーラム(日中韓)への対応などについても、学会として積極的に取り組むことが確認された。

次に、2008年度の学会大会について、意見交換がなされた。今年の学会大会は、6月7日・8日の両日、流通経済大学(柏キャンパス)で開催される。2008年度は、日中社会学会創立30周年、かつ、第20回大会という記念すべき節目の年となる。大会実行委員を務める根橋正一会員、東美晴会員から、特別講演、シンポジウム、書評セッションなどについての案が示され、それを受けて、出席者のあいだで活発な意見交換がなされた。

シンポジウムでは、中国から若手研究者を招聘すること、日中・中日両社会学会の研究交流と関連したシンポジウムの設定、環境分野を専攻する会員のコーディネーターや環境分野に関心をもつ人への入会の呼びかけ、若手の育成に努めることなどが確認された。

■2007 年度第 3 回理事会報告

2008 年 12 月 9 日（日）
筑波大学・東京キャンパス

審議事項

1. 『日中社会学会ワーキングペーパー集』 の名称変更について

ワーキングペーパー集『日中社会学会ワーキングペーパー集』の名称変更について、事務局より提案がなされ、審議の結果、了承された。

ワーキングペーパー集の名称は、次号（第 3 号）から、『21 世紀東アジア社会学』となる。

併せて、『21 世紀東アジア社会学』に対する「事務局査読委員会」を設置することが決定された。

なお、名称変更の理由は以下のものである。

2005 年度から、「研究ノートと同等もしくはそれ未満」の作品を掲載する『日中社会学会ワーキングペーパー集』を発行してきた。その目的は、①「研究発表の機会拡大」、②「研究内容の向上」、③「研究集会の成果の公表」であった。

ここに、新たな目的として、③大学院生など若手研究者の大学・研究機関への就職のサポートを追加したい。また、④グローバル時代が直面している課題に対して、中国研究から得られる知見を生かして、積極的に提言していくスタンスを明確化したい。

この新たな目的を達成するために、『日中社会学会ワーキングペーパー集』の名称を変更し、業績書などにおいて、論文業績に相当する評価が得られるよう査読体制も整える。同時に、アジア社会研究や世界の華人華僑研究が日中社会学会にとっても重要な研究領域のひとつであることを意思表示したい。

なお、本件に関連して、2007 年 12 月 10 日にメールによる持ち回りの理事会が開催され、『21 世紀東アジア社会学』の発行時期の変更について、事務局より案が示され、審議の結果、了承された。

これを受けて、『21 世紀東アジア社会学』の発行時期は、現行の毎年 1 月から、毎年 6 月に変更される。

事務局が、『21 世紀東アジア社会学』の発行時期変更を提案した理由は、以下のものである。

①本学会の機関誌『日中社会学研究』の発行時期は、従来、毎年 6 月であったものが毎年 10 月へと移行しており、既に、定着して 5 年ほどが経過した。従って、『21 世紀東アジア社会学』の発行を毎年 1 月とするのは、編集日程上、たいへん厳しい。

②従来、機関誌『日中社会学研究』の査読でリジェクトされた投稿論文のなかで、ある程度のレベルを有しているものに対する救済措置を、学会として十分に講じることができなかった。執筆者の同意が得られれば、『21 世紀東アジア社会学』において掲載する。

③毎年 6 月初めの大会にて『21 世紀東アジア社会学』を会員に配付し、通信費の節約に努める。

これに関連して、2007 年度予算「ワーキングペーパー集制作費」を、2008 年度予算「ワーキングペーパー集制作費」として繰り越すことについて事務局より提案がなされ、審議の結果、了承された。

2007 年度予算「ワーキングペーパー集制作費」として計上された 80,000 円は、今年度での支出を取りやめ、2008 年度の「ワーキングペーパー集制作費」として繰り越す。

2. 名誉会員の資格条件について

日中社会学会会則の第7条「本会に、必要に応じて顧問を置くことができる」に対して、「名誉会員」の設置に関する第7条第2項を新たに設けることの是非について議論がなされた。

議論の結果、「名誉会員」の資格条件設定が困難との意見が多数を占めたため、「名誉会員」へのニューズレターや機関誌贈呈といった事業は、年度ごとの理事による事業として位置づけることが決定された。

3. 長期会費滞納者への対処について

会則第4条「会員で引き続き3年間会費を納入しなかったものは、会員の資格を失う。」に則り、会費納入状況を精査し、該当者に対して督促を行った上で、除籍の手続を行うことが決定された。

4. 今後の研究プロジェクトについて

2007年度研究集会(12月9日)に行われた、研究プロジェクトに関する議論の内容を踏まえて、今後、会長、理事、事務局のあいだで一層の情報の共有を図り、プロジェクトを実行に移してゆくことが確認された。

5. 入退会について

事務局より案が示され、2名の入会、1名の退会が承認された(本誌末に掲載)。

以上

■在中会員通信

「第1回北京老年電影節」イベント活動に参加して

出和暁子(中国人民大学)

中国には「重陽節」と呼ばれる祝日がある。旧暦の九月九日とその日にあたり、別称「老人節」又は「敬老節」とも呼ばれる。日本の敬老の日と言ったところであろうか……。これは、中国の伝統的な祝日であり、『易経』には「九」を陽の数とし、九月九日は九が二つ重なるために、「重九」と呼ばれ、この日を古人は祝う価値ある吉日とし、旅に出かけ景色を賞したり、菊の花を觀賞したりと多彩な活動が行われたとある。また、「九九(JiuJiu)」は「久久(JiuJiu)」と中国語の発音が同じであり、そして数字の中でも最も大きい数であるため、長寿の意味が含まれている。今日では、新たな意味が与えられ、1989年に、毎年の旧暦九月九日が「尊老、敬老、愛老、助老」をモットーとした老人の祝日「老人節」となった。そして、この時期には、全国における各機関、団体、街道が退職した老人たちのために秋旅行や登山などの大自然触れあいイベントを企画している。

総人口に占める老年人口の割合が年々増え続ける中国では、老人に関する研究が関心を集めているが、昨年の重陽節の時期に、「祝重陽—第1回北京老年電影(映画)節」と称するイベント活動が開催された。これは、2003年、中国人民大学に新設された老年学研究所と、北京市老齡工作委员会弁公室、中央戲劇學院影視&伝媒文化研究センター、法制晩報が共同で主催したものであり、私は、このイベント活動の一スタッフとして参加する機会を得た。

今回開かれた北京老年電影節は、映画を精

神文化普及のための媒体とし、人口の高齢化がもたらした社会構造の変化、またそれによって生じる人や社会、人と人との関係の変化などを映し出すスクリーンを通して、多くの老人たちが自らを尊び、愛し、自立し、向上心を持って日々を過ごし、積極的に社会に溶け込み、社会へと参与していけることを主旨としている。まさに、「アクティブエイジング」の提唱、推進とでも言えようか。一方では、より多くの若者たちにも老人たちの実際の生活や彼らのニーズを理解し知ってもらい、彼らの立場に立って物事を考えることを学び、彼らを敬い、愛し、助ける気持ちを培い、世代間における調和をはかることもこのイベント開催の主旨である。

取り上げられた映画作品は全部で 10 作品で、いずれもここ 15 年余りにおいて老人をテーマとして描かれたものである。例えば、老人と若者との世代間ギャップを描いたもの、老人の精神世界や心を描いたもの、老人にまつわる家族関係を描いたものなどである。これら 10 作品の中には、日本でもなかなかの高い評判を得た『我們倆（邦題：私たち）』（馬儷文監督、金雅琴、宮哲主演、2005 年）、『剃頭匠（邦題：フートンの理髪師）』（ハスチョロ（ハス朝魯）監督、チン・クイ（靖奎）主演、2006 年）、『過年（邦題：過ぎにし年・迎えし年）』（黄健中監督、葛優・李保田主演、1991 年）が含まれる。テレビでも連日 10 日間にわたりこれら 10 作品が放送され、また、開幕式会場では『我們倆（私たち）』を上映し、退職した高齢者、人民大学の学生など総勢数百人余りが集まり鑑賞した。その後も北京市内の数箇所の社区居民委員会において同映画を上映し、会場に集まった高齢者に対して簡単なアンケートを行った。これらをもとに、後日、老年電影節討論会が行われたが、これには大学の研究者、政府機関の方々、各社区の老人の方々、老年学を専攻する院生、また、『剃頭匠（フートンの理髪師）』

のハスチョロ監督（当日は、残念ながらアマチュア主演俳優のチン・クイ爺爺は東京国際映画祭に参加して帰国したばかりということで不参加だった）、中国国内の著名なベテラン俳優までもが出席し、この老年電影節開催の意義や、老人を題材とした映画制作の意義、また日頃老人側からみた若者に対する見解、一人っ子側から見た両親に対する思い等々、各人が様々な立場から活発に議論を交わした。閉幕式では『我們倆（私たち）』で一人暮らしの老婆を演じる金雅琴さんと女学生に扮した宮哲さん、『過年（過ぎにし年・迎えし年）』主演の中国国民的人気俳優である葛優さんも来場し、そして、最近流行っている老年モデル隊や老年合唱団など数々の出し物も披露され、豪華なゲストを招いての盛大なイベントであった。この閉幕式の模様は当日、テレビ局で生放送されたらしい。

このようになかなか、楽しいイベントだったが、このようなイベント活動が開催された背景には、現在の中国の老人たちの退職余暇生活が単一的で、彼らの精神文化生活を充実させるために、そして健康づくりのために区内で多様な活動を組織運営していく必要性が研究者たちによっても指摘されていることがあるだろうし、また、核家族が増えるとともに、若者が祖父母といっしょに生活してコミュニケーションをとる機会が少なくなり、お互いの精神世界を知ることができない状況にあること、そして、昨今の若者たちの尊老、敬老、愛老、助老精神が薄らいでいる社会風紀に対する危機感を懸念しての現われとも受けとれるのではないだろうか。

■留学雑感

蘭州・四方山話

池本 淳一
大阪大学大学院博士課程
蘭州理工大学

過年好！ 池本です。春節も過ぎ、いよいよ暖かくなって来ましたねえ。なんて書き出しますと、中国の春節についてレポートしそうなモノですが。実は春節中、日本に帰っておりました。というわけで、今回はタイムリーなネタもないので、私の現在の居住地である蘭州について書いてみたいと思います。

蘭州は西安の西北に位置する甘粛省の省都で標高約 1500m、新潟と同じぐらいの緯度の場所にあります。市内の北側には西から東にかけて黄河が流れており、市内にはそれなりに緑もありますが、一步市街地にでるともう秃山ばかりの風景が続きます。夏は高原性気候のために大連よりも涼しく過ごしやすいです。しかし冬場は大変厳しい土地柄となります。まずは乾燥と気温。内陸部なので空気が非常に乾燥しており、寒さも 1 月下旬頃には最低気温 -15 度に達します。これらに追い討ちをかけるように、中国でも一、二を争う空気汚染が襲います。蘭州は冬になるとその谷状の地形と風向きにより、北部の工場や油田の排煙が市内に充満してしまいます。もっとも近年では空気の汚染度はマシになったそうですが、それでも全国で一、二を争うレベルです。「なんか蘭州は曇り空や霧が多いなあ、砂漠なのに。黄河のせい？」と思っていたら、スモッグでした、という感じです。ちなみに中国では毎朝、天気予報とともに「今日の汚染指数」というのが発表されますが、蘭州の冬は「外出を控えるように」政府から勧告されてしまうレベルが普通です。

日本一の汚染度を誇った大和川の傍らで、堺臨海工業地帯の光化学スモックを吸って育った堺っ子の池本ですが、さすがにこの空気汚染には参りました。案の定、12 月の中旬に、みごとに喉をやられまして。はじめは運動後にちょっと咳き込む程度だったのですが、次第に始終咳き込むようになり、最後には夜も咳き込んで眠れない、といった事態となりました。聞けば、蘭州にきた日本人留学生は初年度かならず喉をやられて「血を吐く」そうです。おそろしや。

こんな空気ですから、冬になるとマスクをつける人も多く、道行く女性のほとんどがマスクを着用しています。それらを見ると、動物やなんだかよくわからないキャラクターのワンポイントが入ったものから、花柄や水玉模様のマスク、そして中には真っ黒なブラックマスクまで多種多様であり、逆にシンプルな無地のホワイトマスクはほとんど見かけませんでした。おしやれは口元から、が蘭州スタイルのようです。ちなみにこれらのマスクは露天で靴下とかと一緒に売られています。逆に、男性はほとんどマスクをしていません。していたとしてもお年寄りだけで、その場合のみ無地の白色マスクとなります。男性の方が喉が強いのか、それとも男性がマスクしていると「男のクセに！」といったマスキュリニティー的なナニがあるのかもしれませんが。

また個人的にこの冬、一番苦しめられたのが国内時差とパスです。周知のように、中国の標準時間は北京を基準に決められており、蘭州のような最果ての地まで来ますと、標準時間と実際の生活時間が完全にズレてしまいます。蘭州は大体タイと同じ経度なので、標準時間と生活時間の間には約一時間ほど差がある計算となります。例えば夏の場合、夜の八時を過ぎてようやく暗くなる、といった感じです。また冬場は 1 月頃では日の出が朝の八時過ぎとなります。私は週に二三回、

一時間ほどバスに揺られて武術の師匠のところに通っているのですが、だいたい八時前に家を出ています。つまり、日の出前の真っ暗な中、バスに揺られるわけです。で、先ほど申しましたように、1月の最低気温は-15度。日の出前はその最低気温であり、さらに私が乗るバスには暖房がありません。つまり、冷凍庫の中で一時間ほど座りっぱなしという状況です。もう何枚重ね着してもまったく効果がないため、どうしたものかと苦心した私は、セーターとジャンパーの間に湯たんぽを挟み込むようにして抱えこみ、内から体を暖める作戦に出ました。それでも師匠のところにつくまでには足先がガチガチに凍えてしまいますが、バスの中で「遭難」することはなくなりました。

それから蘭州では日本人が10人ぐらい(ほとんどが留学生か学校の日本語教師です)しかおらず、外国人全体でも100人ぐらいしかいません。外国人がレアな存在であるため、蘭州の人は街中に異邦人がいる、という発想がありません。例えば街中で日本語で話していても日本人とは気付かれませぬし、おそらく私たちが話しているのは南方の方言か何かだと思われてしまいます。同様に、知り合った蘭州の人に名前を教え、「お前姓が二文字だな、何族だ?」と聞かれることが多いです(蘭州の日本人の間では、「大和族」と答えるのがお約束です)。

こんな蘭州ですが、全体的にのんびりした良い街だと思います。そもそも西部大開発自体が政府主導ですので、蘭州人にとっては「なんにもしなくても街がどんどん発展して行く」みたいな感じに捉えられているようです。道のあるけば果物が実ってる、みたいな。つまり南国気分。で、そうなるとのんびりしているというか、競争心がないというか。あの中国人特有(と思っていた)の「押しの強さ」や「ガツガツさ」は見られません。というわけで、極寒極西の南国で、排煙に悩ま

されつつも、池本は武術と研究に明け暮れる毎日をおくっております。ではでは、今回はこのへんで。

■ソシオロジー Rooted in Life

かつてのテレビっ子

南 誠 (L i a n g X u e J i a n g)

京都大学大学院

2008年は中国の年である、と囁かれている。確かに、これまでの経済高度成長を成し遂げてきた中国にとって、8月に開催される北京オリンピックは、その勢いに更なる拍車をかけるに違いない。このきょうい(驚異/脅威)的な成長ぶりが世界中の注目を集めている。しかしその反面、経済格差の拡大、環境の悪化といったマイナスな側面も問われている。これらの問題は日本のテレビでもしばしば取り上げられている。たとえば、先日、日本のテレビで中国若者のネット依存症問題の特集を観た。その問題は個人、家庭に止まらず、青少年犯罪等の社会問題にまで発展している。軍関係の医療機関まで設立され、問題解決に取り込んでいる。その中で興味深かったのは、子に対する親の説教であった。ネットに夢中する子どもに対して、その母親は“(ネットばかりやっていたら)将来性がなくなる”と叱咤する。思えば、13歳まで中国で生活していた私も親から同じようなことを言われた。ただしその時はネットではなく、テレビであった。

そう、私はテレビっ子だったのである。いまさらテレビなのかと驚く人が多いかもしれない。しかし、1976年に生まれた私が生活していた中国では、テレビはまだ殆どなかった時代であった。私が住んでいた農村にテレ

ビがはじめてやってきたのは、1980年代に入ってからであった。村で普及したのはさらに10年ほどの時間を要した。

当時の村では老若問わず、皆テレビに釘付けになっていた。最も印象深かったテレビドラマは、香港の「射雕英雄伝」であった。このドラマは二回ほどリメイクされたが、未だに当時のバージョンが最も人気を博している。日本のテレビドラマもその時代から流行り始めたように思う。日本の山口百恵や「おしん」を知ったのもその時だった。小さいときから、母から祖母が日本にいることを聴かされたが、日本という存在を実感できたのはそれらのドラマを通してであった。

そんなテレビっ子が今日本にいて、研究者を目指していることを当時の誰が考えていたのだろうか。おそらく、私を含めて誰一人いなかった。またテレビ好きだったがゆえ（もちろんこれだけではないが）に、テレビ番組を研究テーマにもしている。これまで、中国帰国者のテレビドキュメンタリーを分析したことがある⁽¹⁾。これからは中国帰国者関係だけでなく、中国国内のテレビ番組をも研究してみようと考えている。そして番組収集も始めている。いくつかを観た感想は、やはり面白いという言葉に尽きる。それは単にストーリーの展開が面白いだけではなく、それを通して垣間見る中国の社会変動、文化様式の変容等が興味深い。最近では特に中国版「紅白」とも言うべき「春節聯歡晚会」を網羅的に観ている。2008年の春節はもうすぐということもあって、それに少し触れておきたい。

「春節聯歡晚会」は現代中国人の“新民俗”であると言われている。考えてみれば、確かにそうだ。春節は毎年の一大行事である。私の村の春節を言うと、大晦日（除夕夜）、夕食を済ませてからはテレビをつけて「春節聯歡晚会」を観る。一家揃って机を囲い、談笑しながら餃子を包み始める。テレビから12時の知らせを聞いたら、外に出て花火を打ち上

げる。12時を待ちきれずに、その前に花火を打ち上げに行く年もしばしばあった。しばらく外の寒気に身を晒して、村の家々の花火を見比べて楽しんでから、家の中に戻る。外の爆竹の音を聞きながら余韻を味わいながら、アツアツの餃子を頬張る。今でこそ、春節に食べる餃子の種類もバラエティに富むものとなっているが、昔は餃子と言ったら酸菜（白菜を発酵させたもの）猪肉が定番であった。餃子だけを見ても、昔と今は20年足らずだが、大きく変貌している。

このように、テレビ番組「春節聯歡晚会」は明らかに現代中国人の“新民俗”となっている。無意識のうち、生活の中に取り込まれている。だが既存研究でも指摘された通り、「春節聯歡晚会」を通じて伝統的な家庭主義が強化され、更にその家庭は国家という「想像の共同体」へと吸収されている。何気なく楽しんでいた「春節聯歡晚会」は、こういった政治性を孕んでいる。それだけではなく、そこから更に多くのことが読み解れるはずである。今後の観賞は楽しくなりそう……。

日本に来てからもう19年になる。春節の時に、中国へ戻ったのは一度もなかった。今年もまた「春節聯歡晚会」を見て春節の気分を味わうほかない。ネットの調子が良ければリアルタイムで見られることもできる。かつてのテレビっ子は今ネットにも夢中している。@_@ そして、4月からは日本学術振興会の特別研究員（PD）として研究することになった。こうなったのも、日中社会学会の会員を始め多くの方々のおかげである。この場を借りて深謝。

(1) 南誠『『中国残留日本人』の語られ方—記憶・表象するテレビドキュメンタリー』（山本有造編『満洲 歴史と記憶』京都大学出版会、2007年）。

■会員の研究動向

日中社会学会と中日社会学会の協力記念——日中社会学叢書の刊行

中村則弘（愛媛大学）

日中社会学叢書〈グローバリゼーションと東アジア社会の新構想〉（明石書店）の刊行がいよいよ始まり
ました。

福武直初代会長以来の夢でもある、日中社会学会会員による叢書の刊行です。また、日中社会学会と中
日社会学会との協力記念出版です。李培林所長（中国社会科学院社会学研究所）、羅紅光教授（同研究所）か
らは、巻頭・巻末の言葉を寄せていただきました。中国社会研究、日中研究協力の新たな扉は開かれつつ
あると感じています。日中社会学会の新たな歩みは、ここから始まります。

各巻タイトル、刊行予定などは下に記した通りです。監修は中村則弘・袖井孝子・永野武が行いました。

- 1巻、『脱オリエンタリズムと中国文化—新たな社会の構想を求めて』2008年2月刊行【編著】中村則弘
- 2巻、『チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ』刊行予定(2008年8月)【編著】永野武
- 3巻、『グローバル化における中国のメディアと産業—情報社会の形成と企業改革』刊行予定(2008年6月)
【編著】石井健一・唐燕霞
- 4巻、『分岐する現代中国家族—個人と家族の再編成』2008年3月刊行
【編著】首藤明和・落合恵美子・小林一穂
- 5巻、『転換期中国における社会保障と社会福祉』2008年3月刊行【編著】袖井孝子・陳立行
- 6巻、『中国における住民組織の再編と自治への模索—地域自治の存立基盤』刊行予定(2008年7月)
【編著】黒田由彦・南裕子
- 7巻、『移動する人々と中国にみる多元的社会—史的展開と問題状況』刊行予定(2008年9月)
【編著】根橋正一・東美晴

前のニューズレターに書きましたように、新たな研究プロジェクトの推進、中国での研究集会の開催な
どの事業が続きます。また、この叢書が7巻ほどで終わるものとは、全く考えていません。改めて、われ
われ日中社会学会と中日社会学会の手で、世界に向けた中国社会研究・アジア社会研究、トランスナシ
ョナルな学会活動の途を拓いてゆきたいものと考えます。新たな扉をさらに開かれればなりません。

日中社会学会はこの叢書の刊行に企画の段階から深く関わってきました。関連内容の学会での報告、若
手会員からの原稿公募などの取り組みが活かされてもいます。

明石書店への申し込みはチラシを利用して直接行うことが便利です。代金引換郵便で直送されます。

（学会特別価格での販売です。送料・税込みで、1巻は税込み定価3,150円のところを2,820円、4巻は
税込み定価4,515円を3,910円で販売します。今後、刊行予定の巻については、別途お知らせします）。

また、一括で予約したい方は、吉岡・中村までお申し出下さい。

一括予約の場合は、事務局業務補佐・吉岡智子までメールないしはファックスでご連絡ください。

順次、代金引換郵便にて直送いたします。

連絡先：nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp（吉岡智子）、fax 089-927-9366

送付先：住所、氏名、電話番号を明記してください。なお、マンションにお住まいの方は、マンシ
ョン名・部屋番号等もお知らせください。

■新入会員の声

○蔣 莉

所属：広島大学大学院教育学研究科博士後期課程

研究テーマ：中国における大学教員のリクルートに関する研究

研究領域：高等教育

私は中国人留学生で、出身地は中国の陝西省咸陽市です。大学時代は地元の西安外国語学院で過ごし、日本語を習いました。卒業後、日本語教師として就職しましたが、自分の日本語能力に対する不満・不安が日々高まってしまい、日本に留学したいという気持ちが強くなりました。運よく留学が実現し、就職して2年後に日本に来ることができました。

最初は1年、2年くらい日本にいて、日本語が上達し、日本の文化に触れることができたなら帰国する予定でしたが、途中で、気持ちが変わりました。一時帰国するとき、ちょうど中国の大学院入試の時期でした。何年か前の大学入試を思い出させるほど大学院の入試試験の競争が激しくなったことを知りました。中国も高学歴社会になろうとしていることを感じました。日本で修士の学位を取得したほうがいいと考えるようになり、大学院に進学しました。その後、好きな研究テーマにも出会えて、大学院博士後期課程に進学しました。現在広島大学大学院教育学研究科に在学中です。

自分自身の体験の影響を受けていたかもしれませんが、私の研究のテーマは「中国における大学教員のリクルートに関する研究」です。90年代後半から、中国の高等教育規模の拡大が進み、中国の教員市場は、大きな世代交代を迎えました。多くの30代、40代の若い人たちは副教授、教授となりました。

この人たちはどこで養成され、リクルートされてきたか、世代別でどんな違いがあるかなどについて関心を持ち、中国における大学教員のリクルートとその特徴を明らかにしたいと考えています。

基本的に真面目でおとなしい性格ですが、大雑把なところも結構ありまして、私は真面目なのかなあとってしまうこともあります。そういう時は、「私はO型だから、仕方が無いなあ・・・」と勝手に解釈し、自分に弁解します。まあ、でも人間は多少矛盾があったほうが楽しいかもしれませんね。私は矛盾している自分と付き合いながら、楽しく過ごしています。

○黄 斌

所属：早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程

研究テーマ：中国における近代ナショナリズムの受容及びネーションの想像

はじめまして、早稲田大学アジア太平洋研究科に在学している黄斌です。どうぞ宜しくお願いします。

ナショナリズム問題に関心を寄せ始めたのは、大学時代からです。でも、当時ナショナリズムを言うと、まず思いついたのは日本の軍国主義や中国の一部の少数民族による「国家分裂」運動だけです。「中華民族」に対する帰属感と愛情は、侵略志向や狭隘な自民族中心主義などとは全く無縁の「愛国主義」であるため、ナショナリズムと一切関係ないと思いこんでいました。

しかし、日本に留学してから、そうした信念が動揺し始めました。そのきっかけはいわゆる「華人」たちとの出会いです。「華人」たちは「中華民族」の一員であることをアピ

ールする一方で、「中国人」ではないと明言します。「中華民族」＝「中国」という私の従来の「常識」が覆されました。華人たちは文化・血縁の紐帯で結ばれたエスニック・グループの「中華民族」と、政治単位のネーションとをはっきり区別している、ということがわかるようになりました。それで、マレーシアの華人教育問題を取り上げて、「華人」たちのエスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティとの緊張関係について修士論文を仕上げました。

だが、自分の中には依然として大きな疑問が残されています。つまり、なぜ中国人のいう「中華民族」と華人のいう「中華民族」の間にずれが生じるのですか。「中華民族」は一体何ですか。その疑問を答えるために、私は「中華民族」という言葉の出現のルートを追跡し、ついに中国における近代ナショナリズムの受容とネーションの想像という研究テーマに辿り着きました。

博士論文では、中国の近代ナショナリズムは西洋や日本から受け入れた政治原理であり、「中華民族」は近代ナショナリズムにより創り上げられた共同体である、という近代主義の仮説を検証し、さらには、中国ナショナリズムの出現と成長における日本要素や伝統文化要素などの役割を明らかにしたいと思います。

昨今においては日中両国の国民はお互いのナショナリズムに対する警戒感が非常に高まっています。その中には事実の誤認やナショナリズムという政治・社会現象に対する誤解が一因ではないかと思っています。この研究は、そうした誤解を無くすために少しでは役に立てばと思います。

まだまだ未熟の研究ですが、12月の発表で会員の皆様から非常に貴重な意見をいただきました。ご親切、誠にありがとうございます

ました。これからも、ぜひ引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

○白鳥蘭

所属：筑波大学大学院人文社会科学研究所
研究領域：メディア、価値意識

私は白鳥蘭と申します。現在、筑波大学大学院人文社会科学研究所現代文化・公共政策専攻（情報メディア・伝達論分野）に所属しております。

私は、中国内モンゴル自治区の出身で、内蒙古大学において、「新聞」つまり日本でいうところの「メディア」を専攻し、内モンゴルのメディアの歴史や現状、さらに中国全体のメディアの現状などについて学びました。そこでは「新聞は党、政府の喉舌である」ことが当たり前だと思っていました。しかし、日本に留学して、先進国のメディアの現状に接し、これまで学んだものを新たな視点で考え直す必要があることを痛感しました。

内モンゴルでは、昔の遊牧生活から定住化が進んだ生活変容にともなうメディアの影響を考察し、さらに、変化する社会に影響される人々の現状を把握するため、アンケート調査などを行いました。内モンゴルでは、生活変化に伴う人々の価値観の変化、メディアに対する意識の変化、さらに中国人の行動原理の源とも言われる「面子」についても、モンゴル民族との比較対照を行い、分析作業を行っているところです。

本論は、大学生に対するアンケート調査分析を中心としていることから、分析結果の蓋然性には限界があります。

今後、今の研究をさらに深化するためには、より詳細で広範なデータの収集や内容分析が必要であり、日本のデータとの比較も必要

と考えております。私としては、是非、実証的研究の極めて乏しいこの分野に一石を投じたいと考えております。

○齋藤あつ子

所属：早稲田大学アジア太平洋研究科博士
課程

研究テーマ：中国都市小説に遺されたく隠れたる神の痕跡

まず、わたしがこのような研究を始めた経緯を説明します。1980年代後半から90年代をピークに中国で都市小説ブームが起りました。都市小説とはヨーロッパで生まれた「近代都市における人間のあり方」を描いたものです。たとえば、バルザックの『人間喜劇』は、1831年から50年にかけて書かれた未完の小説です。そして、わたし自身が中国の都市小説を読むなかで、いわゆるヨーロッパの都市小説とは異なる点を発見しました。ヨーロッパの都市小説を読むと、「人間とは何者か」を深く考えさせられ、人間として深い反省の念を抱かされます。ところが、中国の都市小説を読むと、「日本人とは何者か」を深く考えさせられ、日本人として深い反省の念を抱かされます。小説の中に日本人など登場しないにもかかわらずです。これはいったいなぜなのでしょう。

この問いに対する答えを探すなかで、中国の多くの都市小説には旧約聖書でよく知られている集合人格概念が用いられているのだと思い至りました。たとえば、旧約聖書の中で、アブラハムは個人でありながら、集団全体を代表した人間として描かれています。アブラハムと神が交わした契約は、ユダヤ民族と神が交わした契約を意味します。アブラハムとはユダヤ的なるもの、ユダヤ的人間の

原型なのです。そして、神（ヤハウェ）とはユダヤ社会に秩序をもたらす絶対的な存在です。

中国の都市小説には、作家が考える中国的人間の原型が興味深く描かれているものがたくさんあります。ヨーロッパの都市小説との比較から言えば、現代の中国人作家たちは、近現代都市においても、個としての人間よりも集団としての人間のあり方に興味があるのだと言えるでしょう。集団としての人間のあり方とはまさに社会を意味します。

中国都市小説の中で、作家たちが現代中国社会をどのように解釈しているか、また、社会はどうあるべきだと考えているかを考察しています。作家たちは、小説の中で自己（中国人全体であり、中国社会でもある）と厳しく真摯に、時にはユーモアをもって向き合おうとしています。そこから近代西欧思想に対する中国人としての解釈を読み取ることができます。中国都市小説の中に近代西欧思想を超えるヒントになるものがないかと探しています。比較のため韓国の都市小説も研究しています。

中国社会の実情に詳しい皆様方からのご指導を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

■事務局からのお知らせ

○入退会について

○2007年12月9日の理事会で承認

・入 会

王向華（香港大学）

白鳥蘭（筑波大学）

・退 会

星 明（仏教大学）

○2008年1月の持ち回り理事会で承認

・入 会

齋藤あつ子（早稲田大学）

黄 斌（早稲田大学）

○2008年3月の持ち回り理事会で承認

・入 会

呉 迪（筑波大学）

○会費納入のお願い

学会運営は、申すまでもなく、会員諸氏の年会費によって成り立っています。本学会は、会員数からみると小規模ですが、地域的な広がりからみると、日本全国、海外にまで及んでいます。当然、運営面でさまざまなコストが発生し、やり繰りが“とてもとても”たいへんです。

「理事会報告」でもお知らせしましたように、3年間会費を納入しなかった場合は、会員の資格を失うこととなります。会費未納の方は、ご注意ください。

日中社会学会ニュースレター No.52

発 行：日中社会学会事務局

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

兵庫教育大学・首藤明和研究室

info@japan-china-sociology.org

shuto@hyogo-u.ac.jp

tel・fax: 0795-44-2165 (研究室直通)

○吉岡智子（事務局・業務補佐）

nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp

tel・fax: 089-927-9366

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2008年3月

